

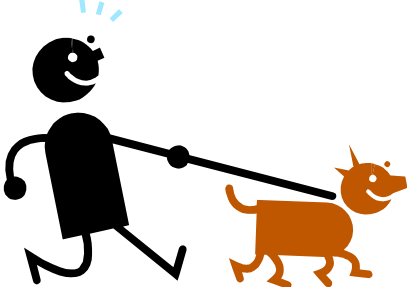
おれはりこうな犬

おれは犬だ。でもただの犬じゃあない。けっこうりこうなのだ。なにしろもの知りで、いろいろなものの名前を知っている。

まるいものを人は「わつか」と呼ぶ。おれの首にもついているが、気分のわるいものでもない。なにしろこれがついていれば、家があつて食べるものにも困らないというたいそうな身分だということなのだから。

「わつか」が二つ付いた乗り物を人は「自転車」と呼ぶ。ご主人がその自転車で出かけようとおれはちよつとうれしくて思わず跳ね回ったものだ。おれを小屋のそばにつないでいる「ひも」をご主人が解いて、散歩に連れて行ってくれるのだとわかったからだ。

この家にはその自転車が二台あつた。奥方の自転車とぼろずの自転車だ。ご主人はこの家で一番えらいのに、ご主人の自転車はなかつた。二番目にえらい奥方の自転車ばかり使つて散歩に連れて行つてくれた。ぼろずはおれより下だから、やつがひもを解き始めた時は、やれやれいざというときはおれがこいつを守つてやらねばと覚悟を決めて、用心棒をきどつて外へ出る。なのに、ぼろずは「言うことをきけ」とばかりにひもを引いたりすることがあるから、たまつたものではない。まかつく子供というやつはわかつていない。



まあおれも小さい頃はわからないことばかりだつた。道の端っこにある深い溝の中でおれはわけわからず震えていた。そこへ奥方が現れ、おれを「自転車」の力ゴに入れて家まで連れて行つた。それからおれは夜になるまで靴の横に置かれた紙の箱の中で丸くなつていた。白い飲み物をもらつては舐めもらつては舐め。いまではそれを「牛乳」と呼ぶことも知っている。そして夜が二回ほど過ぎた後、おれは初めてこの家のご主人を見た。

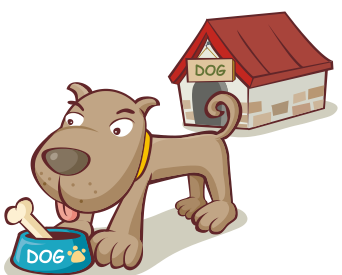
その時は、もうだめだと思つた。またおれは草の中にもぐつたり溝に落ちたりするのだと思つた。なにしろご主人が怖く見えた。嫌な声を出されたり、手を振り上

げられたり足の裏を見せられたり、そんな目にあつたことを思い出し、放り出されてまた外をうろろしなくてはならないのが嫌でおれはご主人に向かつて吠えた。

しかしなぜかそうはならなかった。おれは相変わらず箱の中で寝起きし続けたし、飲み物や食べ物ももらい続けた。ぼうずがぐりぐりと頭を触るのには閉口したが、奥方が耳の後ろを掻いてくれるのが気持ちよかった。最初はあまり家にいないご主人をご主人とは思わず、おれはご主人が帰ってくると吠えてばかりいた。なにせおれも小さかったし始めのうちはものがわからなかったのだ。奥方やぼうずの様子を見ていると、ああこの人がこの家のご主人なのだとわかってきた。つまりご主人が「うん」といったからおれはこの家に居続けることが出来たのだ。

わっかが四つ付いた乗り物を人は「自動車」とか「車」と呼ぶ。この家では車はご主人のものだった。車は自転車と違って、奥方や坊主たちも一緒に中へ入ることが出来る。しかし動かすことが出来るのがご主人だけだということは見ていればわかる。だから車はご主人のものだ。家の庭に四角く区切った場所があり、ご主人の車はそこにあつた。ただ、ないことの方が多かった。いつもと違ってぼうずが朝出かけない日、そういう日にはご主人の車はあつた。ぼうずが朝出かけない日の前の晩にご主人は車で帰ってきた。他の日にはあまり帰って来なかった。

おれが一人でのんびりできるおれの小屋も、その車の中から出てきた。或る日ご主人は奥方とぼうずを車の中に連れて一緒にどこかへ行った。少しして帰って来ると、ご主人は車の中から小屋を取り出した。もっともその時最初に気になったのは奥方がもっていた白い袋の方で、その中に入っているらしい食べ物の匂いがたまらなく、それを鼻先でつついていたらぼうずがわっかにつながるひもをひいたときた。癢に障ったが、すぐにおれの目の前には小屋が置



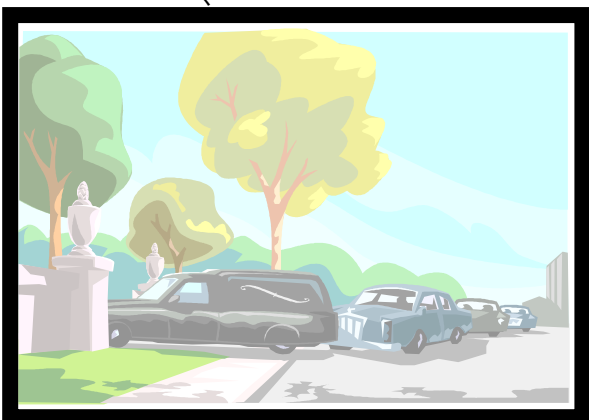
かれた。最初おれはそれがおれの寝る場所になる「小屋」だとはわからずにいたが、なるほどよくみるとそれはご主人たちが中に入って食べ物を食べたり寝たりする「家」と同じ形をした小さいものだ。尻を押されるままにおれはその中に入ってみて、敷かれた毛布の上に落ち着いてみると、なかなかよかった。これがおれの居場所なのだわかるとたまらなく嬉しかった。それを持ってきて置いてくれたご主人

をそのときおれははじめて「ご主人」と思った気がする。はじめて見たときに「怖い人」と思ったおれはなんともものわからない子供だったのだろうとおかしくなった。小屋の中に入ってすっかりおちついたおれを見たときのご主人の優しい笑顔はいまでも忘れない。

だが、利口なおれにもわからないことがある。なんだが、なにが起こっているのかよくわからくて、そのことを考えては首をひねってばかりだ。

ご主人の姿があるときから見えなくなった。どこかにいる気配はするのだが、姿がいっつこうに見えない。これはいったいどういうことだろう。人というものにはこういうことが起こるのだろうか。

或る日、突然「家」が騒がしくなった。次から次へとよその人間が入ってくる。ときどき見かける近所のおばさんから、全く見たことのないおじさんまで。不思議なことに女の人は女の人で、男の人は男の人で、それぞれがだいたい似たような格好で家にやってくる。知らない人間が来たら声を上げてみんなに知らせるのはおれの仕事だから、はりきって吠えてやる。すると奥方やぼうずがおれを叱る。それはないだろう、とおれはおもしろくなかったが、なんとしまいにはおれの小屋が物置や塀に囲まれた薄暗い裏庭に移されて、おれ自身も裏庭につながれてしまった。



初めての事態でおれはいつたいたどうなっているのだと頭をひねって考えていたが、なにしろ様子もよくわからないからしょうがない。時々奥方やぼうずが食べ物を持ってきてくれたので、何か教えてくれるかと駆け寄るも、頭をひとなでするくらいでまた家の中へ行ってしまう。そうして裏庭に追いやられているあいだずっと、家のまわりにはいままで嗅いだことのないような不思議な匂いが漂っていて、おれは気分もよくなかった。

裏庭で過ごした数日間が終わり、おれの小屋がもとの場所にもどされてからだ。それからご主人の姿が見えなくなった。

他にもいくつか変わったことがある。

ご主人の車はずっと庭の一面にとまったまま。

庭に面したテラスから家の中を覗くと、そこにいつも花がたくさん置かれている。花と一緒に、いつもたくさんさんの食べ物が置かれている。いつもいいにおいがしてくるものだから心の中では狙っているのだがなにしろひもが届きやしない。

そして花や食べ物と一緒に、そこにご主人の顔が見える。四角い枠の中からもいつもこっちをみている。

ご主人の姿が見えなくなったといっても、その枠の中からご主人が出てこなくなったせいだなんて思ったりはしない。おれはもの知りだから、あれが「写真」というものだということも知っているのだ。

ご主人はもともと家にいないときのほうが多かった。だから以前は車があまり家にはなかった。ところが今は車がずっとある。ところがおれがわからなくて頭がこんがらかってしまうのは、ご主人の姿が見えないのに、どこかにいる気配がするからだ。ぼうずがよくドアの後ろや庭木の陰に隠れておれを呼ぶみたいに、そんなふうにご主人も遊んでいるのだろうか。いや、そんなガキのようなことをする人ではない。まったく、これはどういうことだろう。

時々、昼間に日向ぼっこしながらうつらうつらしていると、奥方がちょこんとおれの横にしゃがんで、やさしく、ずっと頭をなでる。そんなときに、決まって奥方はぼつりとこぼすのだ。

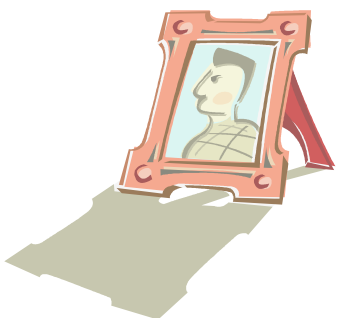
「お父さん、いなくなっちゃったね」

どうやら奥方も、ご主人の姿が見えなくなったことにとまどっているらしい。なるほど、人は犬であるおれよりも感覚がだいぶ鈍い。だからご主人が居る気配がわからなくて困っているのだ。匂いだって、なくなっではない。ご主人も、ちゃんと出てくればいいのに。

ぼうずもときどきおれの横に来ては、一人で泣いている。ぼうずはまだ子供だから、ご主人の姿が見えないのが不安で泣いてしまうのだろう。

奥方はたいいてい一日一度はおれの横に来てぼつりとこぼす。

「おまえは、いいねえ…わかってんの？」



まったく、冗談ではない。どういわけかたしかに姿は見えなくなったが、ご主人のいる気配はおれにはわかってるのだ。奥方やぼうずにこそ、ちゃんとご主人はいっしょにいるじゃないか、わかっているのかといってやりたいが、なにしろこっちからの言葉は通じない。

この間だって、川沿いの道を散歩していると、うしろをご主人がずっと一緒に歩いている気配がするからおれは一声吠えてぼうずに教えてやったが、それをちゃんとわかってはもらえないのががゆいところだ。奥方が台所という奥のほうの部屋にいるときに、表のほうの居間にご主人の気配がするのだって俺にはちゃんとわかってる。ご主人が奥方の方を向いてちよつと心配そうな気分になっているらしい感じがするのだからわかるのだ。そんなとき俺は一声吠えて「ほら、今もそこにいるよ」と教えてやるのだが、奥方は「こら！」とおれを叱るからたまらない。

まあ、人には人なりの感覚しかないのはしかたない。おれがちゃんと奥方やぼうずのそばにいてやって、ご主人がちゃんと一緒にいるということをなんとか知らせてやらねば。

最近ぼうずは、ご主人の真似をして自転車でおれとの散歩に出るようになった。小さいほうの自転車に乗り、ハンドルを掴む手にひもの端っこを握り、よたよたとペダルをこぐ。危なっかしいったらありやしない。自転車に乗るのがそんなに上手じゃないのにご主人の真似をしようなんて少々生意気だが、そんなぼうずがやはり心配なのか、よろよろと走る後ろにちゃんとご主人がついてきてくれているのがおれにはわかる。なぜか姿が見えなくなったことだけはどうにもわからないが、それでもおれは感覚の鋭いりこうな犬だと我ながら思っている。



〈終わり〉